

佐藤 真(さとう・まこと)

1、プロフィール

新潟県水俣病患者の日常を3年がかりで追った「阿賀に生きる」(‘92)で知られるドキュメンタリー映画作家。批評活動も活発でドキュメンタリー映画に関する著書を残した。

<生没>

1957(昭和 32)年9月 12 日～2007(平成 19)年9月4日

<代表作>

「阿賀に生きる」「まひるのほし」「花子」「エドワード・サイド OUT OF PLACE」
「阿賀の記憶」

<青森との関わり>

弘前市生まれ

2、作家解説

弘前市生まれ。2歳で上京。千葉県松戸市のマンモス団地、東京都練馬区の新興住宅地で育つ。東京大学文学部哲学科卒業。

高校時代は8ミリ映画、東大在学中は演劇に熱中。石牟礼道の「苦海浄土」が原作の芝居に関わった縁で水俣病の運動に参加、ドキュメンタリーの世界に足を踏み入れる。「無辜なる海—1982・水俣」(香取直孝)の助監督となり 84 年、この映画自主上映の旅で阿賀野川とそこに暮らす人々と出会い、映画作りを決意する。89 年からスタッフ7人と新潟に移り住み、3年がかりで「阿賀に生きる」(92)を完成。新潟水俣病患者の老人の日常を追う。先輩方の方法論を路襲しながら、「運動」や「政治」からは離れたおおらかな物語に仕上げる。当時のドキュメンタリー映画では異例の劇場公開となる。山形国際ドキュメンタリー映画祭優秀賞、芸術選奨・文部大臣新人賞等、多くの賞に輝き高い評価を得る。第2作は6年ぶり、7人の障害者アーティストの創作活動を扱った「まひるの星」(‘98)。次いで夕食

の残り物を素材に「食べ物アート」を作る花子と彼女を取り巻く家族を追った「花子」(‘01)。夭折した写真家牛腸茂雄の作品について映画的考察を加えた「SELF AND OTHERS」(‘00)「阿賀野に生きる」の続編、12年後の現在と過去を重ね合わせる「阿賀野記憶」(‘04)。「中東レポート アラブの人々からみた自衛隊イラク派兵」(‘04)は、最初の中東旅行の時に撮った「緊急レポート的小品」として仕上げられた作品。次いで、中東の旅で、世界的に著名なパレスチナ人思想家エドワード・サイードゆかりの地にロケを敢行。関係者らの証言をえ、この思想家の「記憶と痕跡」をたどり中東での平和の可能性を探る「エドワード・サイード OUT OF PLACE」(‘05)を発表。テレビ作品、映画の編集・構成など多方面にわたる活躍をみせたが、映画作品は寡作であった。京都造形芸術大学映像・舞台芸術化教授として後進の指導にあたっていたが‘07に急逝した。

3、資料紹介

○「阿賀に生きる」

シナリオ『焼いたサカナの泳ぎ出す』(所収)

1992(平成4)年

149mm×210mm

新潟県。阿賀野川を舞台に、有機水銀の垂れ流しで水俣病患者の流域に住む老人たちの姿をとらえる。監督第1作のドキュメンタリー。彼らの生き生きとした表情を温かい視線で描き、作り手の愛情が自然に伝わってくる作品に仕上がっている。各賞に輝き評価の高い作品。